

修士論文（要旨）

2018年1月

自尊感情と自己志向的完全主義および他者からの存在受容の関連

指導 山口 一 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
216J4010
深海由美子

Master's Thesis (Abstract)
January 2018

The Relationship between Self-esteem and Self-oriented Perfectionism,
Acceptance by Others

Yumiko Fukaumi
216J4010
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate school of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor : Hajime Yamaguchi

目次

第1章	問題提起	1
第2章	研究の目的	1
第3章	研究方法と手順	1
第4章	結果	1
第5章	考察	2

引用文献

第1章 問題提起

完全主義は、全ての問題に完璧な解決があると考え、物事を完璧に行うことは可能であると同時に必要なことであり、わずかな間違いも深刻な結果をもたらすと考える傾向である (Flett & Hewitt, 2002)。石田 (2005) によれば、完全主義傾向の強い大学生は高い目標を課す傾向にあるが、そうした目標はしばしば達成困難であるため、努力し続けるにも関わらず結局は目標を達成できないといった主観的評価が生じ、挫折感や無力感を増幅させる傾向にあることが示唆されている。また、完全主義における他者評価を過度に気にする傾向が集団適応効力感を低下させ、その結果として精神的健康を悪化させることが指摘されている。以上より、大学生の不適応の要因の一つに完全主義に由来する自己評価の低下による自尊感情の低下が関わっていることが推測される。さらに、自尊感情の形成には「周り」から受容されている感覚が大きく影響を及ぼすと提唱するソシオメーター理論 (Leary & Downs, 1995) があり、近年注目されている。以上のような議論から、他者からの存在受容は自己志向的完全主義者に関わらず様々な問題を抱える人々の自尊感情を保持する上で重要であることが考えられる。

第2章 研究の目的

本研究では自尊感情と関連する要因として、自己志向的完全主義と他者からの存在受容感に注目し検討することを目的とする。

第3章 研究方法と手順

関東圏内のキリスト教主義である私立 A 大学に在籍する男女大学生を対象に桜美林大学研究倫理委員会の承認 (2017 年 5 月承認 : 受付番号 16052) 後、2017 年 5 月～6 月に質問紙調査を実施した。質問紙はフェースシート、自己志向的完全主義尺度 (桜井・大谷, 1997)、存在受容感尺度 (高井, 2001)、自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965) から成る。分析には SPSSver. 24 を用い、尺度間の相関、 t 検定、分散分析を行った。

第4章 結果

性差の比較のために t 検定を行った結果、「消極的完全主義」得点と「他者からの受容・感謝」得点については、男性よりも女性の方が、「孤独感・疎外感」得点については、女性よりも男性の方が有意に高い得点が認められた。

次に、相関分析を行った結果、女性は「消極的完全主義」と「自尊感情」得点の間に有意な中程度の負の相関が、「消極的完全主義」と「他者からの受容・感謝」の間に弱い負の相関が、「積極的完全主義」との間に弱い正の相関が認められた。さらに、「積極的完全主義」と「他者からの受容・感謝」、「超越力を意識」、「自尊感情」に有意な弱い正の相関が、「他者からの受容・感謝」と「自尊感情」に有意な中程度の正の相関が、「超越力を意識」と「自尊感情」の間に有意な弱い正の相関が認められた。男性に関しては「消極的完全主義」と「積極的完全主義」に、有意な中程度の正の相関、「消極的完全主義」と「自尊感情」の間に弱い負の相関が認められた。「積極的完全主義」と「他者からの受容・感謝」、「超越力を意識」、「自尊感情」に有意な弱い正の相関、「他者から受容・感謝」と「自尊感情」・「超越力を意識」に有意な中程度の正

の相関が認められた。

分散分析では、「消極的完全主義 × 他者からの存在受容」において女性は、「消極的完全主義」, 「他者からの受容・感謝」「超越力を意識」に有意な主効果が認められたが, 交互作用に有意差は認められなかった。また, 「積極的完全主義 × 他者からの存在受容」においては, 「他者からの受容・感謝」, 「孤独感・疎外感」に有意な主効果が認められたが, 交互作用に有意差は認められなかった。一方, 「消極的完全主義 × 他者からの存在受容」において男性は, 「消極的完全主義」, 「他者からの受容・感謝」, 「孤独感・疎外感」に有意な主効果が認められたが, 交互作用に有意差は認められなかった。また, 「積極的完全主義 × 他者からの存在受容」においては, 「積極的完全主義」, 「他者からの受容・感謝」, 「孤独感・疎外感」に有意な主効果が認められたが, 交互作用に有意差は認められなかった。

第5章 考察

まず, 本研究において自己志向的完全主義の「消極的完全主義」に性差が見られた。「消極的完全主義」は, 頑なな高目標の設置, 失敗への恐怖, 強迫的な傾向と疑念などの特徴をもつが, 女性の方が男性よりも有意に強くその傾向をもち, 自尊感情に悪い影響を与えていることが示された。女性は「消極的完全主義」と「積極的完全主義」の相関が低いためこの2つの間の関連はあまりないと考えられることができるが, 男性は「消極的完全主義」と「積極的完全主義」の相関がある程度高く, この2つは類似した部分があると考えられることができる。また, 「他者からの受容・感謝」については, 女性が男性よりも有意に強く感じていることが示された。これは, 女性の方が男性よりも人との繋がりなどのネットワークをより多く持っていることが考えられる。逆に, 「孤独感・疎外感」は男性の方が女性よりも有意に強く感じている様子うかがえた。これは, 男性は特に青年期において女性よりも互いの内面に影響するような深い関わりを回避する傾向があるため, 心理的孤独感を感じている者が多いことが考えられる。

次に, 男女共に予想通りに「消極的完全主義」の傾向が高いと「自尊感情」は低く, 「積極的完全主義」の傾向が高いと「自尊感情」は高いことが示された。また, 「積極的完全主義」の傾向が高いと「他者からの受容・感謝」と「超越力を意識」をより多く感じる傾向があることが示された。さらに, 「他者からの受容・感謝」を多く感じていると, 高い「自尊感情」をもっていることが示された。女性においては, 「消極的完全主義」の傾向が高いと「他者からの受容・感謝」を感じるものが少なく, 「超越力を意識」する気持ちが高いと, 高い「自尊感情」をもっていることが示された。

最後に, 消極的完全主義傾向が高くなるものが「自尊感情」の低減に関連していることが明らかとなった。

引用文献

- Flett, G. L. & Hewitt, P. L. (2002). *Perfectionism*. Washington, DC: American Psychological Association.
- 東山正靖・谷 好充・志和資朗 (2006). 完全主義と自尊感情が摂食障害に及ぼす影響 広島修道大学大学院人文科学研究科・広島修道大学人文学部 日心第70回大会発表
- 石田裕昭 (2005). 大学生の完全主義傾向と課題解決方略の非効率性—なぜ彼らの努力は報われないのか— 社会心理学研究, 20, 208-215.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
- 大谷保和・明田芳久 (1999). 完全主義と心理的健康の関係—心理的不健康生起モデルを用いて—上智大学心理学年報, 23, 61-72.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. New Jersey: Princeton University Press.
- 桜井茂雄・大谷佳子 (1997). 自己に求める完全主義と抑うつ傾向および絶望感の関係 心理学研究, 6.
- 高井範子 (2001). 他者からの受容感と生き方態度に関する研究—存在受容感尺度による検討— 大阪大学教育年報, 6, 245-254.